

『唯識比量鈔』に関する一考察

蜷 川 祥 美

『唯識比量鈔』二巻は、平安末期の法相宗の学匠、藏俊（一〇四〇—一一八〇）の著述である。本鈔はその名の示す通り、唯識比量に関する二十の問答によって構成される鈔本である。

日本の法相宗における因明研究は、古来、慈恩大師基（六三二—六八〇）の『因明入正理論疏』に基づいて行われてきた。善珠（七三三—七九七）の『因明論明灯抄』十二巻をはじめとし、藏俊にも『因明大疏抄』四十一巻が現存する。この二書は共に『因明入正理論疏』の註釈書であるが、『因明論明灯抄』が、一つ一つの疏文について随文解釈を施すといった体裁を取るのに対し、『因明大疏抄』は論題を設けてそれを配列し、『因明論明灯抄』の註釈を基準に他の註釈書を列記していくという体裁を取る鈔本である。日本の法相宗の因明研究は、このように『因明入正理論疏』を如何に解釈するかを中心に据えたのであるが、その中の難問である四種相違といった個別の問題についてのみ取り上げた短釈も多くの学

僧によって著されている。藏俊にも、『有法差別相違略抄』一巻や、『四相違要文』十冊といった四種相違に関する鈔本が見られ、因明研究の細分化の傾向が見られる。

さて今回扱う『唯識比量鈔』は、奥書によると、保元元年（一一五六）、五十三歳の時に著されたもので、二十の義門分別からなる「唯識比量」に関する詳細な問答を記す論述書である。こうした「唯識比量」のみを単独で扱った鈔本は、「四種相違」に関する鈔本が多く存するのに対し、ほとんど存在していない。中国にはもちろん存していないし、日本に至ってもこの書が現存する最古のものである。あえて藏俊以前の「唯識比量」に関する詳細な研究をあげるとするならば、善珠の『唯識分量決』の「玄奘三藏唯識比量諍過決第二」の六門分別のみである。

そこで、日本の法相唯識の因明研究の一端を明かすべく、この未活字の資料『唯識比量鈔』を取り上げることとする。

まず、この鈔本は、奥書に、

且く先師の遺訓を遺し、且く末学の愚情に任ず。⁽²⁾

とあり、「先師の遺訓」と「末学の愚情」によって構成されていることが分かる。これは、同じ藏俊の『因明大疏抄』が、善珠の『因明論明灯抄』を中心に様々な引文によって構成され、自身の意見を述べることがほとんどないこととは異なり、かなり、自身独自の説を述べている鈔本であることを示すものである。

たとえば、三藏比量の宗の有法(主辭)に「真故」の語を入れるか入れないかという論議を述べる「真故言入不入有法四」で藏俊は、

今、保元の末代に至りて、誰か大義の是れ非なるを判ぜん。然りと雖も、且く、入有法の義に依るべきか。(中略)真故の言を以て、有法の処に属すが故に、有法に入ると云う。有法の躰とは為さざるなり。

と述べて、有法に入る義を取っていたようである。ただ、有法に入るといふのは、有法の処に入ることであり、有法の体そのものであるという解釈は否定しているのである。大変、微妙な解釈である。しかし、『分量決』の「真故決第一」の前半で、善珠は、

問う。「真故」の二字は、有法に入るとす。以て不なるとなすや。答う。不入なり。⁽³⁾

と述べて、不入の義を取っていたことが知られている。ま

た、「有法の処」という表現については、

今、謂わく。極成の色は、有法の処に、「真故」等と云う。此に依りて明らかに知んぬ。勝義に依りて立て、世俗に依らずして、簡別を顯すが故に、有法を真と云うと名づく。以て有法と為すにあらす。⁽⁴⁾

として、「有法の処」を有法と同じものとしなないことから、不入の義を証明しようとしている。

藏俊の『唯識比量鈔』は、善珠にかなりの影響を受けているとはいっても、その請売ではなく、独自の説を展開している鈔本であることが分かる。

また、宗の極成の色とは唯識教学での何にあたるか問う「極成色躰六」では、

答う。此に四説有り。一に云わく。本質と影像の色を合して躰と為す。二に云わく。唯だ、影像の色のみなり。三に云わく。本質の色なり。四に云わく。眼の所行の共許の色なり。問う。何を以て正と為すや。答う。前の三は正しからず、第四を正と為す。

と述べて、藏俊は眼の所行の共許の色であるという説を取っている。しかし、善珠の『分量決』の「極成色躰第二」の前半では、

極成の色とは、正しく是れ本質色なり。⁽⁵⁾

と述べられており、ここでも、藏俊と善珠の説が異なっていることが知れる。

では、奥書で述べられた「先師の遺訓」とは、善珠の遺訓ではないのか。そうではなく、『因明大疏抄』と同様、『唯識比量鈔』も善珠の『因明論明灯抄』を重要視している。

一例をあげるならば、「極成之言簡法五」では、結論として『明灯抄』を引用するのみでこの問答を終えている。

このように、蔵俊は、多くの論義で、善珠の『因明論明灯抄』を規範としている。少なくとも、先師達の一人は善珠であると言えよう。

以上が、『唯識比量鈔』の大まかな特徴であるが、この鈔本は、『唯識比量』という、諍論の場において唯識教学をいかに矛盾なく宣揚するかといった面に重きを置く問題を扱ったものである。蔵俊も、「三蔵比量証文二」で、

三蔵の量には一字として、証文無きこと有ること無し。亦た、一言として深義の無きこと無し。一に訶りて云う。邪を斬るの智の刃は、正を樹るの指南者かな。

と述べて、因明の論理としては問題点を多々指摘される唯識比量を、破邪顕正の智慧として高く評価している。こうした面を有するのが、日本の法相宗の因明研究の特徴の一つであるとも言えるし、これまでにみられない詳細な研究を、師説にとらわれない自由な問答によって発展させることができたのも、蔵俊、引いては日本の因明研究の一つの特異性だと思われる。

なお本鈔の内容についての論述は、別の機会に譲ることとする。

- 1 拙稿『唯識比量鈔』の研究』（『仏教学研究』五十一号・平成七年三月十七日発行）において、第一門より第九門までの翻刻、書き下し、大意を論述した。後半については、現在執筆中である。
- 2 龍谷大学蔵元文五年（二七四〇）写本『唯識比量鈔』下の奥書
- 3 大正七一・四五一・下
- 4 大正七一・四五一・下
- 5 大正七一・四五二・上
- 6 『因明論疏明灯抄』巻第四本（大正六八・三三四・上）（国訳・論疏二二・四二六）

〈キーワード〉『唯識比量鈔』、唯識比量、蔵俊

（龍谷大学兼任講師）